

BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION of JAPAN

放送人の会

No. 29
2006. 11. 24

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

Tel&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 磯村健二、伊藤雅浩、鈴木典之、長沼士朗、松尾羊一



第6回 日韓中TV制作者フォーラム

2006.10.27-30 金大中コンベンション・センター

制作者フォーラム雑感・光州の旅

河野尚行

夕暮れの干潟を紅く染めるサンゴ草

群を横目に睨んで高速バスが仁川空港に滑り込んだ時、フォーラム御一行様のバス乗車時間はのべ十六時間を超えた。

松尾ご隠居さんの「人間は旅をしながら、移動しながら考えるものだ」ということばを信じるならば、今回の日・韓・中制作者フォーラムは、バスに揺られながら考える旅でもあった。

場所は全羅南道の光州広域市、会場は一年前に開館した巨大な金大中センター。光州は韓国第3の大都市である。会場は新開発地区の西にあり、宿舍のホテルは中心街をはさんで町の東のはずれにあつて、朝晩のバスの移動で、たつぷり一時間はかかる。

フォーラムも回を重ねるにつれてお馴染みの顔が増えた。新しい若々しい顔ぶれにも出会った。韓国語、中国語が飛び交い、使う言葉に不自由を感じると、なぜか味覚、嗅覚など視聴覚以外のセンサーまで活性化され、非日常の気分が横溢する。身体を動かさず、なじみの空間で、三国のDVDを取り寄せて番組を視聴しても、こうした高揚感は得られない。ドキュメンタリー部門の審査を仰せつかったので、やや詳しく報告する。一國、二作品の出品。いずれも丁寧な作りの優秀な番組である。ただ気になるのは、夾雑物が注意深く取り除かれ、素材の角が丸くされ、消化しやすい物語に、

仕立てられ過ぎていることだ。

中国視点文化「孤独な四不像の話」

一時は世界で十六匹にまで減少した鹿に似た貴重種の「四不像」を追い、人の手で育った主人公の「四不像」を野生に戻そうとする保護区監視員の闘いを描く。数々の難題に耐えた主人公が、ついに野生のオスとして群れを率いるボスに成長する物語が、実に巧みに展開している。しかし、もう一つ自然の迫力や妻みが伝わってこない。それは何故か。

韓国MBC「君は僕の運命」

末期ガンを病み、苦しむ女子大生と献身的な看病を続ける三十七歳の男。純粋な愛が的確な映像と美しい男女の語りで描き出され、韓国社会で大反響を巻き起こした作品である。貧しい彼が二年間魚の仕事を休んで女性に尽くすのだが、この間彼がどうやって生計を立てているのか、番組は全く触れない。それは何故か。

韓国KBS「転向」

北朝鮮から韓国に送り込まれた工作員達。軍事政権下で長期間収容され、厳しい拷問を受け、ついに転向。南の社会に釈放される。しかし、彼らを待ち受けるのは激しい差別と偏見。そして今、太陽政策の下、北へ送還されることを願う祖国に残してきた妻子との再会を夢見

て、韓国で作り上げた絆を整理してその日待つ。重い証言と具体的事実を積み上げ韓国軍事政権の過酷な人権抑圧と韓国社会の現実を告発、分断国家の悲劇を暴いた骨太な社会番組である。しかし、番組は、彼らを妻子から引き離し、南に送り込んだ北の非情さについては一言も追求しない。それは何故か。

果たして、視聴者はそれほど、シユガーコーティングされた塩味のどぼしい感動の物語を欲しているのか。メディア側が勝手に思い込んで、分かりやすい物語の中に事実を押し込んでいただけではないのか。これまでの自分の言葉では説明できない世界を掘り起こすことがドキュメンタリーの醍醐味ではないのか。実はこうしたことを制作者と、熱く話し合いたかった。昼のスケジュールは無理。夜、宿舍で酒でも飲みながら、通訳の助けを借りて話したかったのだ……

今回のフォーラムは時間の管理には課題が残った。だが、光州ビエンナーレや順天の生ける民俗村の見学、韓国禪宗の総本山・松廣寺の訪問と韓国精進料理

の賞味など韓国文化を理解する為に、実に細かい配慮と準備がなされていた。

そして、トイレタイムを気にしての長時間バス移動が最後に大きなお土産をくれた。終始、私たちのガイド役を勤めた金頭哲さんが最新の韓国映画を車内で上映してくれたのだ。

題名は「王の男」。揺れる小さな画面に英語のスーパー。十分理解できたとは言えないが、このドラマに圧倒された。王に対峙する大道芸人の芸と気迫。社会の賤民である芸人が、土俗の仮面劇と人形劇をシンボリックに操り、時の権力者・王の深層の狂気を挑発する。そこに遊る性と暴力と愛憎のドラマ。ドラマのデッサンの明晰さと緻密さ、その構築力。役者の演技と空回りしない映像の新鮮さを堪能した。異国を移動しながら、また一つ新しい体験が加わった。

帰宅した日の夕刊で黒井千次が「年配者にとつて、異国を旅することは、日頃の暮らしの中では気づかぬ老いを自覚することだ。自分の老いの中へ旅することでもある。新鮮だ。」と述べていた。光州の旅を終えて、私も、それに共鳴した。

フォーラム組織委・鄭氏と懇談

三カ国フォーラムの日本組織委員会（放送人の会・放送批評懇談会・放送番組センターで構成）は十一月十三日（月）千代田放送会館で代表者懇談会を開きました。フォーラム主宰者・鄭秀雄氏の東京に合わせたもので、会には東京キー局代表の山田良明・フジテレビ常務も同席し、大山勝美委員長を中心に韓国大会を総括すると共に、今後のフォーラムの進め方について話し合いました。その結果は、鄭氏を通じて、次回・中国大会に反映されます。

協道ふうに

大山 勝美

「光州」は韓国民主化の聖地といわれている。1980年、学生・市民たちが軍当局に立ち向かい死傷者多数を出した「光州事件」の舞台である。

映画「パーミント・キャンデー」は光州事件を扱っていて、映画にうつし出された街は、平屋の民家の多い地方都市であった。そのイメージを追いかけたが、現実には高層ビルの多いミニ・ソウルという感じの街である。

1894年、光州では農民一揆「東学党の乱」を起し、その鎮圧の応援を頼まれた日・清の軍隊が衝突、「日清戦争」のきっかけを生んでいる。その反骨の野党的精神の雰囲気は街で探ろうとしたが、スケジュールがタイトで息つく暇がないほどのだ。

ホテルから三十分かかって会場に着くと外に出る余裕がない。しかも、昼と夜の食事はバイキングで、三日間見事に同じメニューであった。

再来年の日本主催のことが頭をよぎる。海外からの来訪者は、民間文化外交使節で、その国の庶民の素顔に多く触れた方がいいと思つた。

日本語を学んでいる一人の女子大生とすこし話をした。イジメは韓国でもあつて、日本語がそのまま使われている。福山雅治の大ファン、そのため中国語専攻希望を日本語に切り替えたほどである。

彼女を含め、韓国の若い女性たちの茶髪は少なかった。「ああ、アジアの女性たちの髪は黒かったのだ」と久しぶりにそう感じたのである。

大会共同宣言

山田 尚

バスに乗っている時間があまりに長かったり、作品試写が途中でブツリと切られたり、同一メニュー連続の食事に驚いたり、いろいろありました。その一方、制作者同士の交流が進んだり参加作品にフォーラム賞(最優秀賞、優秀賞)が新設されたり、共同宣言を採択したりと、第六回ともなると成長もしているようです。

ということ、閉会式で発表されたけど、どこにも公式書面のない(?)共同宣言を、ここに記しておきましょう。

韓国の光州において開催された第六回日韓中テレビ制作者フォーラムで、私たちは次の通り意思を同じくしたことを宣言する。

- 一、日韓中のテレビ番組を質的に一層向上させ、親睦と相互交流を増進し、ひいては共同制作の実現と国際化を図るという目的を確認する。
- 二、二〇〇六年光州シンポジウムのテーマである、ひと、自然、文化を調和させるという精神を放送番組に反映し、日韓中はもちろん、世

界平和と繁栄に寄与できるよう最善を尽くし、このような私たちの意志を各国の数多くの制作者に広く伝え、具現するようにする。

- 三、この度の光州シンポジウムで初めて実施した「日韓中テレビ制作者フォーラム賞」を一層拡大発展させ、科学的で公正な、名実共に国際的で権威ある賞になるよう最善を尽くす。

「素材」に終始

—エンターテインメント部門—

村上 雅通

フォーラム3日目の午後、予定されていたエンターテインメント部門の総括は中止された。会場に集まったのはわずか6人、その中に制作者は一人もいなかったからだ。これは、今回のエンター部門の状況を如実に物語っているようだった。エントリーされたのは、日韓中からの六作品。日本の二作品を除けば「不毛」と言われても仕方ない内容だった。韓国EBSの「コレアコレア」には、韓国人が北朝鮮をどう描くのか大きな期待があったのだが、北朝鮮にまつわるクイズ、脱北者たちのルポルターージュのいずれも薄っぺらなものだった。中国広西電視台の「金花を求めて」は、わざわざ韓国まで出かけ美女探しをする内容。何故、外国に行く必要があるのか理解に苦し

んだ。ほかの二番組も然り。作品に加工する前の素材ばかりを見せられた思いだった。テーマを絞ったからなのだろうか、東アジアを代表する娯楽作品とは言えない。次回は、テーマ、ジャンルを決めたほうがいいと思う。いい作品からは、時代、人間、制作者の様々な側面が見えてくる。論議も深まるだろう。そして、各国平等ではなく、真剣勝負の審査で東アジアの頂点を決めて欲しい。制作者であれば、誰も異議を唱えないだろう。

大会に参加して

長沼 士朗

このフォーラムで私は、ドキュメンタリー部門の三つの作品、六作品を全部視聴した。いずれも取材時間をしっかりとった力作ぞろいであつたが、その中でも特に印象に残つたのは、韓国KBC制作の「転向」と、日本のCBC制作の「日本最高齢の助産婦」という作品であつた。前者は南に派遣された北朝鮮のスパイ出身者で転向した長期囚の生活を描いた作品だが、我々には測り知れない、民族を分断された朝鮮半島の人々が抱える複雑な問題の一断面を見せつけられる思いがした。後者は九十三歳の助産婦さんの元氣な活躍を描いた作品。誰よりも早く汚れない生命にさわる自分の手を、神の手になぞらえている主人公の誇りと暖か

い心情が爽やかに伝わってきた。担当の宇佐美ディレクターは二十九歳の青年であった。

初日の主題発表では、KBSのプロデューサー梁承東さんの「市場原理中心のアメリカの大規模農業に対抗し、農村と自然を守るため、小農的農業の再生を考える番組を三国で共同制作したい」という提案が、特に強く心に残った。ぜひ近い将来実現するといった提案だと思おう。

会期中、このフォーラムの参加作品を広く多くの人に見せたいという声をいくつも聞いたが、全く同感である。できればNHKの衛星チャンネルで放送する機会があればいいと思った。

お母さんのふところ

萩野慶人

仁川国際空港での関心事は「日本のTVが日夜伝える緊張感が肝腎の韓国ではどうか、太陽政策下で露骨な危機感禁句なのかも知れない」だった。

光州広域市の金大中コンベンションセンターの玄関ロビーには金前大統領を讃える展示コーナーがあり、金正日北朝鮮国防委員長と握手するパネルが目には止まる。ノーベル平和賞も両者平等に贈るべきだった……と本気で思う。

韓国のドキュメンタリー『転向』では、北の工作者が南の長期受刑囚となり思想転向で出獄できた四人が証言する。「妻は若い。私の病身で面倒をかけたく

ない。北は私を棄てないだろう」と離婚して送還申請したい73歳と「止めても留まる人ではない」と涙を拭う妻は59歳。分断国家の苦悩は深刻だ。

エンターテインメント部門の『コレアコレア』も意表をつく。テンポいい進行で金剛山を目指すクイズ「挑戦！統一大韓民国」は、北の生活を学び悲願達成の暁に備える趣向。人気アニメ『賢いタヌキ』紹介の次は脱北同胞をルポする『涙の豆満江』。中国側から対岸を望み「母のような故郷を捨てるのは悲劇！」と啖く38歳に粉雪が優しい。

帰路のバスを停めた樂安邑城民俗村でも「ここはお母さんの懐にいる気分させます」とガイドさんが唱える。

「どこの国にも戦争が好きな母親はいない。諒解！」と早合点は慎みたいが、訪韓四日の後味は悪くなかった。

強行軍

鈴木典之

民主化の拠点の土地イメージと、象徴的政治家の名を冠した会場に興味もあって参加しましたが、民情に触れる時間が取れなかったのが残念です。

強行日程の幕開けは、仁川の空港から光州の会場までの四時間半に及ぶ高速バス走行。日本でいえば東京・名古屋間でしょうか。しかも、開会セレモニーを一時間待たせてのすべり込み。半島の、韓国領の3分の2の距離を一気に南下

したことになります。

バイキング形式ながら宮廷料理風の宴が終り、またバスで小一時間移動して宿舎に着いたのが夜十時過ぎ。郊外一等の景勝地「無等山」麓のホテルは、眼下に光州市街の夜景がきらめく浪漫ムードですが、初日から疲れ果てた老爺二体の相部屋では、それも猫に小判。最上階の豪華バーに繰り出した酒仙たち、翌朝の感想は「酒の値段が高すぎる」。

期間中は、ホテルと会場をバスで往復する。点と線だけの精励ぶりと、毎回同じ宮廷風料理の食事に我慢を強いられました。会議自体は、生真面目さとケンチャンナヨ（おおらかさ）が同居する民族気質の運営ぶりが面白く、自然体の相互交流は大いに深まったように思います。最終日の半日観光は、空港までの四時間半を確保するため、ガイドの説明も全員で小走りで聞く破目となりました。

三年連続参加して

磯村健二

揚州、東京、光州と3年連続で参加して見て感じていることは、少しづつではあるが三ヶ国の参加者の間にこのフォーラムに対する共通認識が生まれてきた気がする。多分一番色々とまだ難しい中国ですら、トップダウンのたてまえとは別に、制作者同士だから語り合えるという意識が見え隠れしている印象を

持った。

私に関して言えば、三年前は日本が他の二カ国より技術的には勿論、内容的にも先を歩いている意識が正直強かったが、今回の他国の参加作品、分科会での討論から、逆に、日本のテレビが失ってしまった何か（定かではないのだが）があるような気がした。

今回も記録係の一員としてデジカメを期間中覗いていたが、その参加者の表情も三年前よりアット・ホームになって来た気がする。

ただ、これから本当に何が生まれるのかにはまだ時間が必要かも知れない。続けることが大切なのかも知れない。

光州にて

石井清司

韓国は軍少壮たちのクーデターにより、朴軍事政権は倒され、全独裁政権に移行していた。全「政権は民主主義と自由を取り戻そうと全国で蜂起する民衆の力強いうねりを、権力と軍隊で抑えていた。

光州は、そんな貴重な歴史のうねりの、挺身的な拠点になった。その先頭に、学者、知識人、宗教者、学生たちが身を盾にして立ち、農民や都市の民衆など韓国の大衆は、歴史の中で培ってきたエネルギーを、歴史的な反抗の力を発揮し、投入された。全「政権の降下した空挺部隊やその軍隊と対峙し、軍隊は彼らに発砲、多

くの民衆が死傷した。

一九八〇年当時、韓国は「全」政権の発した戒厳令下に置かれ、民衆の行動は厳しく制限された。韓国民主化闘争のもとで、多くが軍隊に無差別に殺戮されたいわゆる「光州事態」だった。

その惨劇の歴史的な街光州市で開かれた日韓中制作者フォーラムへ私は参加した。

八〇年八月十七日未明、ソウルでは民主化闘争の象徴だった金大中ほか学生、宗教者たちが逮捕され、身柄を拘束された。午前、全羅南道光州市の全南大学生一〇〇人は、特別空挺隊に入校を阻まれ、負傷し、全市に抵抗の輪が広がった。無差別暴行と連行。外出禁止時間は午後九時にくり上げられた。軍令下「死者なし」と虚偽放送をした放送局は市民によって焼かれた。

私はその光州市の金大中コンベンションセンターにいた。激しい衝突のあった今光州銀座といわれる錦南路。元道庁前や高速バスターミナル。市はずれの国立墓地にはその時の死者が眠っている。私はやっとその地に立った。

—光州市から帰国の日に記す—

仁川空港で走った

今野 勉

前からの約束があつて、フォーラムの最終日に仁川空港へ飛んだ。飛行機の下アが開くと、空港の職員二人が私を待ち

構えていた。光州行きのバスは三分後に出発だという。空港構内の電気自動車に乗せられた。フルスピードで旅券審査のカウンターに向かった。先客が並んでいると見るや、職員の一人が私を別のカウンターに案内した。私だけのための審査を十秒間で終えて、走った。その間に別の職員がバスの発着所に先回りしていた。その職員がバスの運転手と話していた。バスを待たせているのだ。私と一緒に走ってきた職員が運転手にチケットを渡した。バスは定刻二分遅れで出発した。

仁川から光州まで、四時間の旅だった。受賞作品の発表の場に辛うじて間に合った。ひとり遅れて参加する私のための煩わしい対応を、韓国のスタッフがきめ細かく配慮してくれたお蔭である。感謝。そういうわけで、今回のフォーラムそのものについての見聞報告は私には出来ないが、日韓中の制作者を結ぶ「ここ」については、大いに感ずるところがあった。来年からはちゃんと日程をとって、初日から参加するぞ、と決意して、帰国の途についた。

光州大会に参加して

寛 昌一(放送番組センター)

三ヶ国からの参加番組は韓国、中国のドキュメンタリーとドラマはかなりのハイレベルな作品が多かった。韓国

KB S『転向』は北のスパイ長期囚の出所後の人生を証言によって描いているが南北問題を切実に訴える。中国雲南テレビ局『茶馬古道』は地元出身の監督が消えつつある歴史と文化交流の道を長期撮影によって見事に記録した作品だった。韓国SBS『ハノイの新婚』は農村の花嫁不足や外国人差別などを背景に手堅い恋愛ドラマだ。中国内蒙古テレビ『喬家大家族』は清朝末期を舞台に四五分×四六本の大ドラマ。出演者の演技とストーリー展開も巧みで、現在放送中の『チャングム』の後釜でも十分に話題になるのでは？と密かな期待をもった。

共同制作に関する総合討論会で韓国延世大学金教授の「韓流・日流に続き東流の流れを作り、東アジアの価値を世界の価値に広げていきたい」との発言が、今後の番組制作や放送人交流のポイントの様な気がした。

ソウルに残り、KB SとKBI(韓国放送振興院)のデジタルアーカイブ機関を訪問し、番組保存と活用を中心に視察した。デジタル技術に取り組む韓国の進展は大変に参考になった。

ノリ、ウケ狙い

伊藤雅浩

韓国のエンターテインメント番組「コレアコレア」にはノリの良い一般視聴者が多数登場した。物真似をする学生のグ

ループ、歌う中年おばさんのグループなど、どれもせず多くの観客の前でウケ狙いの芸を披露する。いずれの芸にも会場で見えていた韓国の参加者から爆笑が湧いたから結構芸達者なのだろう。

三日目の表彰式の後の出し物の太鼓とエレキバイオリンによるロックにも韓国の若い通訳たちは手を叩き、奇声をあげ、日本のコンサート会場での観客の騒ぎようと同じ実に楽しげなノリである。

また、帰途のバスの中で見た韓国映画「王の男」は大道芸の笑いが王の権力と対峙するドラマだった。笑いは権力にとって極めて危険な武器である。韓国の国民はテレビで遊ぶ文化と一緒にこの危険な武器も自分のものにしていくようだ。今回出品された韓国の作品は必ずしも優れた娯楽作品とは言いがたかったが、韓国には優れた娯楽作品やお笑い番組を作れる環境は既にあると私は思った。

一方、中国のテレビにはまだ毒のあるジョークや今日の日付のある諷刺は解禁されていないようにみえる。エンターテインメント部門の総括に参加者が少なく中止になったのは、日韓中の間の笑いの文化についてのギャップがまだまだ大きいということではないだろうか。

韓国の通訳の人に、「ノリが良い、悪い」「ウケ狙い」に当たる韓国語を聞いてみたが、適当な言葉は見つからなかった。娯楽番組に関する相互交流はまだこれからである。

第6回日韓中TV制作者フォーラム in 光州 (フォト構成 磯村健二)

2006.10.27~30



金大中コンベンション・センター



光州市



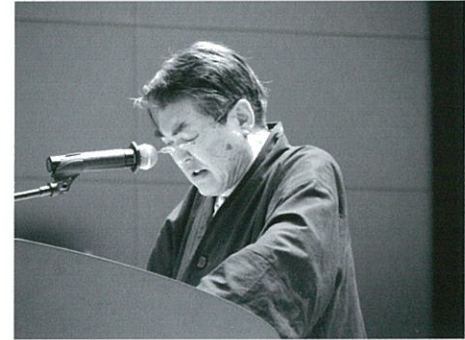
山田良明 組織委員挨拶



開会宣言 鄭秀雄 組織委員長



全体会議



特別講演 詩人・金芝河



各国参加者



ドラマ分科会



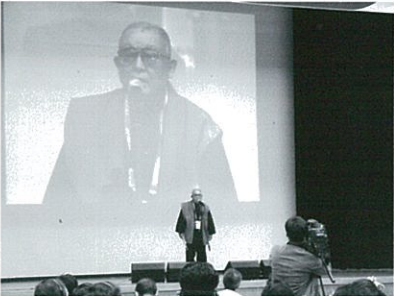
激励辞 河野尚行 顧問



参加作品試写



主題発表 NHK 磯部信夫CP



審査発表 松尾羊一 審査委員長



大討論会



入賞トロフィー



発言中の寛昌一氏



順川 松広寺にて

イベントニュース

☆ 『名作の舞台裏 イン群馬』

ドラマ「車輪の一步」(NHK79年)からボランティア活動を考えるゲスト 斎藤洋介 斎藤とも子

山田太一

司会 中村克史(演出・放送人の会) 主催 群馬NPO協議会 放送人の会 放送番組センター NPO法人国際比較文化研究所(主宰 太田敬雄)

・十一月四日 前橋市民文化会館

今回は「舞台裏スペシャル」として「第15回全国ボランティアフェスティバルぐんま」とのコラボ企画。

山田太一シリーズ『男たちの旅路』の中の一話「車輪の一步」は、車椅子の若者たちが「街に出てみよう」と渋谷の街を歩き、ハンデをもつ人たちに向ける目に身障者たちが厳しい現実を知る。まだ新進だった出演の二人が当時のロケ撮影の思い出を語り、脚本の山田氏はボランティア活動をめぐって忌憚のない所信を述べたり、作品をめぐる普段の「舞台裏」とはまた違った進行(手話通訳もつく)が興味深かった。ただ開始時間が早朝で会員参加が期待できないことが課題になった。放送人の会からは今野勉 大山勝美の両氏が出席した。(記 太田敬雄)



山田太一氏を語る自作

InterBEE『公開シンポジウム』放送とインターネット

「ジャーナリズムの未来を担うものは誰か? Part2」

パネラー

神保哲生(日本ビデオニュース代表)

金平茂紀(TBS報道局長)

吉永春子(現代センター社長)

司会 今野勉(代表幹事)

・十一月六日 幕張メッセ国際会議室

恒例の国際放送機器展で挿入される「出前イベント」だが、観客層に特化し好評だった前回企画をさらに発展、ジャーナリストはどう立ち向かうか、より現実的な視点にたったパート2。

免許事業とネットワークによる業界秩序、記者クラブなどによる情報の寡占化形態下で形成されてきた放送ジャーナリズムをめぐり、「ジャーナリズム不要論」(堀江貴文)をはじめ在来型のジャーナリズムへの不信感、ブロードバンドによる参加型システムの可能性について神保氏はむしろ、電送路

の無限解放性に視聴率に依拠しない本来のジャーナリズム原理主義が貫徹するとする。それに対し、金平氏は二者択一的にジャーナリズム機能の優位性を論議の対象とし、幅を狭めることはない、現場レベルではIT機能を既に加味し、融合した取材観をもっている。むしろネットにみるアジェンダ・セッティング(提案機能)の欠落、ポピュリズムなオピニオンなど、未成熟な部分を補完しあう両義性にたった展開が望まれるとする。また吉永氏は一貫してジャーナリスト像の現実を見据え、いかなる装置が生まれようと、ジャー

ナリストたる資質を試す場が問われると、本質的な議論立地の不在に警鐘を鳴らす。必ずしも整合化された進行ではなかったが、このように現場間同士が噛むと、よくある情報のビジネス・チャンス論を超えた論点がいくつも噴出し、興味深い二時間だった。(M)

.....

☆ 第16回『名作の舞台裏』

ドラマ『大地の子』(95年 NHK)

ゲスト 上川隆也(主演)

岡崎栄(脚本)

河村正一(制作統括)

司会 荻野慶人(放送人の会)

十一月二十三日 情報文化ホール

敗戦時の混乱から中国に取り残された日本人孤児陸一心と中国人の養父と日本人の実父、その間の現代中国の激動の歴史をからめた本来の意味での「大河小説ドラマ」。それだけに時代に翻弄される主役を誰を起用するか、無名の劇団の中から「陸一心」(上川隆也)を選んだ事情に話題はまず集中した。陸一心は今、山内一豊だ。超満員の大半は女性客。イケメン探しより韓流に走る中で、静かな上川ブームをみたのである。



上川隆也氏



河村正一氏

話題は日中合作ドラマにかけるロケ先現場の数々のエピソードなど語り合うが、上川にとって「陸一心」は原点であり、「日系中国人」の心の底に生まれた「大地の子」は忘れられない、上川もスタッフもその思いはかわらないという。「役」と役者の人柄がこれほど結びついた作品もない。



岡崎 栄氏

しかし、これほど感銘を与えた大作がモンテカルロ国際テレビ祭最優作品賞を獲得したというのに中国では未だに未公開だという。「文革」が吹き荒れた激動の時代背景と人間と家族の極限悲劇。原作を超えた迫力でせまった映像表現がもたらす影響力を、中国側は計りかねているからにちがいない。終わりに河村氏はこの作品を期に上川隆也さんと共に中国の辺境の貧しい村に小学校を建設、その基金集めに今もって奔走中だという。「大地の子」の「続編」は続いているのである。(M)

南船北馬

朗読教室での出会い

藤井チズ子

放送の仕事から遠ざかって久しいが、声を出す仕事は今も続けている。

朗読への関心が高まっているためか、カルチャーセンターでの朗読教室は人気がある。十五年前、あるカルチャーセンターから朗読教室の講師を依頼されたのがきっかけで、そのカルチャーセンターや大学の同窓会などで朗読を教えている。

カルチャーセンターの受講生は熟年主婦が多いが、最近では定年退職した人たちが増えている。朗読を勉強する目的は、アナウンサーになりたかった、朗読を手がけてみたかった、などが多く、手っ取り早い習い事と思われるようだ。その中で十五年ほど続いている教室では、半数の人々が朗読ボランティアをしている。老人ホームやデイケア・センターへ出かけたり、小学生や保育園児に本を読んだりなど、さまざまな場で朗読ボランティアとして活躍している。実際に聞き手を前にしての朗読は一種の自己実現の場となっているようだ。中でも高齢者へのボランティアグループは、長年にわたる活動に対して千葉市から表彰さ

れた。

ところで、最近講座に入った女性が私に一枚のCDを渡し、自分の朗読を聞いて批評してくださいと言う。それは彼女が担当したパソコン通信の番組で、南の国の民話風な子ども向けの物語である。梓アナウンス、音楽、語りなど整った形式で、ラジオ番組と何ら変わりのないものであった。彼女の声は穏やかで、朗読の表現力もよかった。かなり前から朗読を勉強していたようで、彼女のようにカルチャーセンターで朗読を習い、パソコンの世界で才能を生かせるのはITの新しい可能性を示すものだと思います。興味ふかい。

私はこの種の番組がパソコンから発信されていることを初めて知った。いまパソコンの世界では、数多くのソフトの作り手や情報の発信者が存在しているようだ。私の周辺にもそうした作り手が出てきたのである。朗読教室には思いがけない色々な出会いがある。

(元NHK・CP)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ひと味ちがうゼミの若者たち

市岡 康子

「学生たちはよくも心に響く人を見つけてきますね」。5月の「ゆふいん文化・記録映画祭」でゼミ学生たちの制作した映像が上映された時、見た人たちが一様に感嘆したのだ。別府に立地する立

命館アジア太平洋大学3回生を対象にしたわたしのゼミでは、春学期に調査をしてペーパーを書き、秋学期にはそれを土台に映像制作をしている。

主人公には例えば、グリーンツーリズムに取り組む農家がある。都会から訪れる人たちが、おばあさんが摘んできた野の花や座敷に飛び込むトンボに歓声をあげるのを見て、「ありのままを見せればいいんだ」と田舎の生活に自信を取り戻したと述懐する。

また、神戸から来てどう農家になった男性は、一般には出回らない多品種のぶどうを除草剤なしで栽培しながら、地域起こしにも力を注ぎ、イモリ谷というその地域は「村づくり」で天皇杯を受賞した。農薬の使用をミニマムにして香り高い米を作る農家は、農協を頼らず独自に販路も開拓し、田植え、稲刈りなどに自分のお米を食べている人々に参加してもらっている。まさに顔の見える生産者と消費者の関係を作っているのだ。学生たちがこうした人々に出会えるのは、戸別訪問での聞き取り調査に徹した春のフィールドワークの賜物だと思

(立命館アジア太平洋大学教授)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

“実在の人物像”に挑む

星田 良子

テレビドラマの演出が出来るように

なって、今年で十九年になります。いろいろありました：

演出をやりたい、とこの業界に入ったのですが、『女はプロデューサー』と言われ(今でもその傾向があるようです)、はじめて一本撮れたのは三十八歳の時。『いまさら遅い！』『一、二本撮ったとして、それで終るよ』などと言われもしました。それでもチャンスはあるもので、結果はたくさん素晴らしい方たちとの出会い、ご尽力ご協力をいただき、気がつけば、今日ここに至っています。自分に課した人生訓ですが、「人には人の時がある」とつくづく思います。

早い時期に「時」と出会う人もいるでしょうし、五十台、六十台の人だっている。大切なのは「その時」ちゃんと起きていて、ちゃんと向き合えるかどうか：だと思っています。

自分がちゃんと向き合っているのか、わかりません。ただ、信じて、その数少ない「時のチャンス」にすがりつくのみです。

ところで昨今、映画もテレビも「実在の人物」の半生の映像化がブームのようです。まったくのフィクションでなく、と言ってバリバリのドキュメンタリーでもない。事実を虚構でトッピングし、ちよつとデフォルメしてみせるのが心地いのでしょうか。確かに、そこには今、生きてる我々にむけて、ヒントや教訓、感動、夢などを発信する人生なるものが存在する、のだと思います。私も去年は、「瀬戸内寂聴先生」、今年は「全盲ろうの福島ご夫妻」に「新宿の母・栗

原すみ子さん」のドラマ化に参加することが出来ました。

『新宿の母物語』は、フジテレビで十二月放送予定です。

もう若くない自分としては、むさぼるように、人様の半生をドラマ化しながら、己の未来におびえる日々です。

さて来年は…?

(共同テレビ、演出家)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

がんばろう北海道！を発信して

中田美知子

「がんばろう北海道」というテーマで3年ぶりに11時間15分の特別番組を担当した。深夜放送の花形DJでいらした元STVのササッパラさん、北海道を代表するキャスター佐藤のりゆきさんがゲストで出演し、由仁町ご出身のニッポン放送の亀淵昭信さんは録音で参加していただいた。

FMラジオ放送は多分にサブカルチャー的などころがあり、大所高所から北海道にエールを送るのはどうもコソバユイ感じもあった。しかしサブカルならではのゲリラ戦法もあるなど考え、文化・経済・高齢化・観光などを題材に「頑張るためのきっかけづくり」は提案できたとと思う。「頑張ろう」という言葉はアイ・メッセージである。

「頑張れ！」には「あなたが」という主語がつくが、「頑張ろう」は「私が」

という第一人称から発するメッセージという意味をこめた。

小泉政治は地方を置き去りにしたと言われている、確かに地方都市は沈滞している。気持ちまでが沈んでいるが、それは北海道だけではない。どこでもきつと苦しいのだ。ではこれから明るい未来がやってくるのか。

北海道民としては夏の甲子園に駒大苫小牧三年連続出場から、北海道日本ハムファイターズの日本シリーズ優勝にアジア制覇を含め、いまだに「シンジラレナイ！」でいる。アラジンの魔法のランプのように一晩眠って起きると宮殿も美しい姫もみな消えているのではないかと思う。これまで野球なら必ず負ける自信をもっていた。日本一セールで札幌市内の百貨店は、十月の売り上げが前年比30%増だったそうだ。こんな世の中なので無駄使いを控えているが、個人消費が回復すれば経済は活性化するのだ。北海道といえど全国制覇を果たした「水曜どうでしょう」現象と大泉洋をはじめとする「チームナックス」の東京進出も今年の話題だった。TVドラマに、芝居にびつくりするほどの首都圏での活躍である。とくに大泉洋さんは芸術祭ドラマ『東京タワー』（フジ）に主演で出演した。なのに彼らは今でも北海道民なのである。そんな生き方をしたやつはこれまで北海道にいなかった。そうだ、悪いことばかりじゃない。明るい顔に未来は微笑むし、常に勇気のあるものを運命は好むのだ。

(エフエム北海道)

鵜沼海岸から 22

名誉会長 川口幹夫

知床・新旅情

十月の中頃、北海道へ行った。ゴミゴミした都会を離れたかったのと、新しく世界遺産になった知床の現状を見たかったのだ。

羽田を発って一時間半で女満別に着く。ゴミゴミからいきなり広い草原の飛行場につく。緑が鮮やかだ。

路線バスに乗って知床へ向かう。網走を通ってオホーツク海を左に見ながら殆どノンストップで走る。

三時間乗って、やっと知床の入り口に着く。ウトロだ。

新しい観光名所だからどこもかしこも看板だらけと思つたら、全く何も無いウトロの町も新しいホテルが二つ、三つ建っただけ。そつけない。嬉しくなる。

日暮れ近く、ウトロの中心に着く。小さな店に入って鮭中心の夕食をたべる。さすがに、新鮮である。

ウトロには二本の川が流れ入っている。鮭が川を泳いでいる。いい風景だ。宿は丘の上にある。オホーツク海に入る夕陽がウリモノである。

翌朝、ウトロ港から観光船に乗って半

島の突端まで出かける。岸にはオットセイがのんびり昼寝していたりして全く飽きない。観光船の案内も、学生アルバイトのようで、口調が初々しい。美辞麗句を全く使わないのも気に入った。

翌日はバスに乗って知床五湖へ行く。〇〇湖なんて気の利いた名前ではなくて、一湖、二湖、三湖ときて五湖で一巡りである。なんのことはない、学童の島巡りだとタカをくくって歩きはじめたが、石ころだらけの路に足の弱い私は忽ち悲鳴をあげた。二湖の入り口でダウン！

ウイークデーで、年輩の女性が圧倒的に多かったが、皆さんスイスイと「お先に！」などと声をかけて行く。八十翁は一湖のみでダウン。甚だみつもまない。かくして我が知床旅情は第一章のみで終った。

北海道には野心に富んだ数々の成功談がある。その反面に、無残な悲劇も多い。「たくぎん」「雪印」「夕張」。

知床もまた、ちよつと凶に乗ると悲劇につながる可能性がある。

世界遺産に指定されてから北海道は官民一つになって歩きたした。今のところ、すばらしい歩みが続いている。新しい知床！ゆつくりと歩め！期待を込めて、そう願う。

社会派、芸術派、実験派と様々な意匠で現れたドラマをさらに発展させ、円熟の時代をむかえました。再びドラマディレクターの『証言』を集め、その時代の方々を紹介しましょう。

深町幸男さん。成瀬巳喜男監督に私淑する映画人は、60年新東宝倒産を機にフィルムドラマ「テレビ指定席」の監督としてNHKと契約、63年正式に入局しました。一台のカメラで撮っていた映画の職人がテレビスタジオのマルチ方式に初めて接したときの混乱。出演者の森繁久弥さんからはバッド・ディレクターとからかわれた話やリハールをめぐる確執、和田勉さんのこと、数々の代表作について語り、中でも熱く語るのは出合いの重さです。

早坂暁、山田太一、向田邦子、中島丈博さんから作家たち、加えて笠智衆、小林桂樹、杉村春子さんなど俳優たちとの出合いの不思議さ、素晴らしさが生き生きとしたディテールで語ります。早坂さんの『冬の桃』の脚本を「読み終わったとき、そっと静かに台本を置いたそうです。狭い家ですから女房の記憶によると、いつもは、ほかの人が書いたヤツは、ホンを読んだあとパツと投げるくせに、と思ったそうで、それくらい感動したんです」

小南武朗さん。53年北海道放送入社。当時、HBCは演劇研究所を設けスタニスラフスキーシステムによる俳優やディレクターの養成に努めていました。その影響下でラジオドラマのディレクターになった小南さんは、北海道

開拓史を主題に連続ドラマ『石狩川』を作ります。57年テレビ開局でテレビに移り、翌58年、芸術祭参加「北緯四十三度」の演出を担当しました。美術も照明も未整備、スタジオさえなく北大の体育館にセットを組んだ苦労は大変なものでした。スタジオから外へ出て北海道の風土を撮るべきだと考える小南さんは61年、フィルムカメラの身軽さを利用して、離島に生きる幼い姉弟を描いたドキュメンタリードラマ「オロロン島」で芸術祭賞を受賞。このドラマの企画、長期撮影の詳細な経緯から話題は続く安部公房脚本『虫は死ね』や『アポイの休日』に触れます。

と大胆な挑戦を感じさせます。「東京で花火をドオンと上げてよね、あんな大きい所じゃ目立たないが、名古屋はね、どんと上げるとある程度人が見てくれて、失敗したって隠れ場所がある。ある意味で二百万人ぐらい（の文化圏）が適当だったんです」岡崎栄さん。53年NHK入局。まず広島局に赴任し、4年間ラジオドラマ中心に仕事をして57年、AKに転じ楽劇部に所属。まず新鮮なバラエティドラマ『若い季節』を担当。NHKきつての新しい屋を自認する岡崎さんの「証言」は、テレビが若かったころ強行した様々な実験的演出や方法論に触れ、例えば日本初のドキュメンタリードラマ『遭難』と話題は広がります。67年大河ドラマ初のカラー作品『天と地と』で試みた画期的な演出手法、川中島合戦のカラーVTRロケ、71年のニュー時代劇『天下御免』と『天下堂々』、そこで起こった演出拒否事件、ドキュメンタリードラマ『マリコ』、そして『大地の子』など。またドラマのナレーション論、ディレクターの作家性など、テレビ制作をめぐる幾多の問題提起があり、示唆に富んだ岡崎さんの「証言」は展開します。

大臨明さんは51年、開局直前の中部日本放送に入社、音楽課に所属します。53年、伴大納言絵巻を主題にした音楽劇を作り芸術祭に参加、56年テレビ開局とともにテレビ演出に移り、翌57年芸術祭参加作品依田義賢作『古井戸』を作ります。話題のポイントのひとつが芸術祭がらみです。依田義賢作『出所』（58年）、城山三郎作『絵巻屋錦城』（59年）、おなじく城山脚本で王子製紙ストを題材にした『壁』続いて田中千禾夫唯一のテレビドラマ『指』（60年）は、全編指のモニタージュだけという前衛作品でした。また小幡欣治作『勝てば官軍』（62年）、65年には走り幅跳びの選手を目指す混血少女を主人公にしたドキュメンタリーと、大脇さんの仕事は常に実験精神

かそこに広島をとおした戦争、という原点意識があるような気がします」最後は清水満さんです。55年NHK入局。美術進行を勤めたあと、58年に楽劇部に異動、岡崎栄さんと共に『若い季節』を。67年大河ドラマ『天と地と』を演出。清水さんと岡崎さんの「証言」を聞き比べると、制作上の

様々な問題点が、より細かくうかがいがあり、興味をひきます。清水さんは大河ドラマを数多く担当したディレクターの一人で、前記の2作品のほかに『新平家物語』（72年）、『獅子の時代』（80年）『春の波濤』（85年）と演出作品は5本に及びます。「証言」ではそれぞれの作品について作者や俳優、制作中の事件などの思い出が丁寧に語られ、その結果、清水さんによる一種の「大河ドラマ史」として聞くこともできるほどです。

「テレビというのは一人の力ではできない。大勢の人が集まって作品になって行くわけで（中略）その人たちのいいものを全部出しきって使って一つの作品にしようと、とにかくアンサンブルをとりながら作品を完成させて行くというノウハウというか、それは美術時代に経験したことが根にあり、僕の演出のスタイルを作ったのかもしれない、そんなふうに思っています」

すでに一〇〇人余の放送界の先達現場人の証言を久野浩平さんによる精力的な構成で、時代別・分野別・ポジション別・傾向別に分類して、その一端をこの「放送人の証言」欄でかいまみることが出来ます。渦中の本人による肉感的放送同時代史はいよいよ放送人の会を構成する「われらの時代」に突入します。インタビュースタニスラフスキーシステムによる第一級映像資料は他のどこにも存在しません。ぜひ利用してください。問い合わせは事務局まで（M）

ラジオの広場

構成 石井彰

もっとラジオの引力を

小林かおり

YBSラジオの日曜夜10時から放送中の『はんちんぐ』には、毎週400通ものアクセスがある。0時までの2時間、この番組にアクセスするリスナーの6割が小・中学生、3割が高校生残りの1割はさらに上の世代。

パーソナリティのバガボン鬼塚氏と、彼とバンドユニットを組む『きっくん』のトークはラジオ特有の下ネタはともかく、凝った笑いが30代の私のみぞおちを襲う。

YBSラジオの現場は、部長級1名以下、部員8名の部隊。うち7人が30〜34才、1名が27才という偏った制作布陣。ラジオの黄金期を知らずに育ち中、高生時代はW浅野のトレンドイードラマが流行るなか、深夜のTVバラエティーに憧れてマスコミを志望してきた世代だから正直、ラジオに配属とさいて落胆し気を失いかけた人も少なくない。そんな人間でもラジオのスタジオを体感するとラジオ好きになる。

それでもツライと感じるのは、どこかに残るAMラジオの加齢臭。何だろ、この臭い。「今」に呼応していたはずでは？ 鮮やかなラジオを求めてるのに業界は時代を嗅ぎわけられない。蓄膿症を患っていると思う。

最近、日本は「自殺列島」や陰湿な「犯罪列島」になってしまったのかと

思うほど悲しいニュースが多い。

一ヶ月前のこと、山梨の女子高生が自殺未遂をした。そのニュースに若いアナウンサーが言葉を添えた。月並みなコメントではあったけれど、彼なりにいじめに向き合った言葉だった。その後、局に一本の電話があった。「アナウンサーの方にありがとうと伝えてください」と。女子高生の母親からだった。責任の矛先ばかりに気を取られてるテレビにできないことがラジオにはできるのだ。でもSUIや売上げの低下、スタッフの減員など苦しい環境の中で、ラジオは悲劇のヒロインぶってばかり。その前に、ラジオを聴いてる誰かを元気にする放送ができているのか、ラジオの引力がもっと大きな深い輪を描いていけるように願ってる。

(山梨放送ラジオ局制作部)

ラジオ業界の営業マンに

「ガス抜き」の時間を

畑中一也

昨年から毎週土曜に『知ってますか？クスリのお話』という番組を始めた。毎回、薬剤師などに薬の正しい知識を紹介してもらう番組。患者が薬剤師とともに薬を選ぶ時代になるし薬剤師の能力もいま以上に問われることになる。薬剤師に対する関心を高めようというフォーラムが開かれ、薬の服用上の注意点を「マニフェスト」として専門家が解説する動きなどはその一例といえる。インタビューを女性のフリーアナウンサーに依頼し、考査の部分に専門家に依頼する以外、番組のプランニングは自分で行ったし、毎

回の構成は自分で考えている。

地方局の厳しいラジオ営業は仕事とかけもちなのは正直きつい。しかし業務命令の範囲外における、自らのプランニングがインシアチブをとる形の中には「自由な空気」が存在する。入社したばかりの若手社員とともに営業先へ向かう車中で、彼らから斬新なアイデアが次々と出される。粗削りな発想だが既存のビジネスモデルとは明らかに違う、自由な、熱い思いを込めた企画案が出てくる。

つい最近、友人のラジオ制作者とメールで意見交換したら「若い連中の意欲を高めるには、言葉は悪いがガス抜きができる番組」枠を彼らにくれてやるのがいい」と。さらに夜帯に15分でも30分でもいい、他局がやっていないコンテンツを作ってみよう、とけしかけてみてはどうか、と言った。

制作者だけでなく、営業マンにとっても「ガス抜き」が必要なのだ。営業マンは、営業先の先方から「ラジオは聞かれていない」と先入観をもたれ、悔しい思いをしているし、広告費を削減する企業も多い。要求も厳しいし、即効的なCMを求め、番組の演出部分に口を出すクライアントもいて、営業マンはいつも板挟みだ。

AMは「高齢者のメディアだ」といわれるが、必ずしも高齢者層におもねる視点でなく、もっと自由にその生活スタイルで考えることはできないか。営業マンの「ガス抜き」が制作者にもつながれば、それが営業マンの評価にもつながると思う。

(茨城放送営業部)

第9回公開セミナー《放送人の世界》

《真銅健次嗣と人と作品》

はじめてラジオ作品を聴く会です。

会場 放送番組センター 放送ライブラリー セミナー会議室 (10F)

開演時間 両日とも13:30〜17:00

☆第1日 07年3月10日(土)

◆『青春アドベンチャー』光の島』原作・尾瀬あきら(コミック)

脚色・原田裕文 演出・真銅健嗣 松本順 出演・中島陽典 新納敏正ほか

◆FMシアター『夕風の街 桜の園』(平成18年度文化庁芸術祭ラジオ部門優秀賞) 原作 ころの史代

脚色・原田裕文 演出・真銅健嗣 出演・夏八木勲 鈴木佳田ほか

☆第2日 07年3月17日(土)

◆『ドラマ』古事記と神代編』

作・市川森一 演出・真銅健嗣

出演・石坂浩二 戸田恵子 江守徹

◆FMシアター『カーン』

(平成15年度文化庁芸術祭ラジオ部門大賞) 作・小松與志子

演出 真銅健嗣 出演・近藤正臣 宮里 駿 結城しのぶ

■真銅健嗣プロフィール■

一九六三年大阪生まれ、NHK鹿児島放送局を経て番組制作局ドラマ部、現芸能番組センタードラマ部ラジオドラマ演出の専任D。

*ラジオドラマを取り上げるのは珍しいので、ご鑑賞をおまわしています。

新会員紹介：守分寿男（元HBC）佐藤秀山（TBS）
吉沢保（TBS）隈部紀生（NHK）の皆さん。

会員名簿 06・1・19現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美
秋田完 新井和子 有馬哲夫 (い)
石井清司 石井ふく子 石井彰
石高健次 石橋冠 磯野恭子
磯村健二 市岡康子 一色伸夫
伊藤雅浩 井上良介 岩澤敏
岩下恒夫 (う) 上田千秋 碓井広義
歌田勝彦 宇野昭 浦田彰 (え)
江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子
(お) 大蔵雄之助 太田敬雄
大野木直之 大西康司 大西文一郎
大原誠 大原れいこ 大山勝美
大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄
岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明
沖野瞭 荻野慶人 小田昭太郎
小田久栄門 (か) 加賀美幸子
各務孝 片岡敬司 片島紀男
勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫
金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀
加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一
河合肇 川口和久 川口健一
川口幹夫 川竹和夫 川平朝清
河邑厚徳 河村正一 (き) 岸田功
北川泰三 北川信 北出晃
北村美憲 北村充史 木村栄文
木村成忠 木元教子 (く) 楠美昌
工藤英博 隈部紀生
(こ) 小池勝次郎 河野尚行
児玉久男 児玉孝光 後藤和晃
小中陽太郎 小南武朗 近藤晋
今野勉 (さ) 斎藤伸久 齋藤守慶
斎藤秀夫 斎明寺以玖子
酒井美樹男 寒河江正 坂元良江
桜井均 桜井元雄 迫田朋子
佐々木欽三 佐々木彰 佐藤秀山
佐藤年 佐藤利明 沢口真生
澤田隆治 沢田隆三
(し) 重延浩 静永純一 渋谷康生
嶋田親一 清水満 下川靖夫
下重暁子 習田豊 城菊子
(す) 菅野高至 杉澤陽太郎
杉田成道 鈴木克明 鈴木昭典
鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之
須磨章 せんぼんよしこ
(そ) 曾根英二 (た) 高島秀之
高橋一郎 高橋啓 高橋泰 滝大作
武谷雅博 田澤正稔 只野哲
田中昭男 田原英二 田原茂行
(ち) 千葉勉
(つ) 露木茂 鶴橋康夫
(と) 土居原作郎 戸田桂太
外崎宏司 富永卓二 土門正夫
(な) 中崎清栄 中澤忠正
中島僚 中田美知子 中谷英世
長沼士朗 中村敦夫 中村克史
中村季恵 中村耕治 中村美美子
難波秀哉
(に) 西川章 新村もとを
西ヶ谷秀夫 丹羽美之 (の) 野崎茂
野田宏一郎 信井文夫
(は) 萩野靖乃 橋口義春 橋本潔
林勝彦 林健嗣 林裕史 原由美子
原田庸之助 (ひ) 備前島文夫
久野浩平 一杉丈夫 (ふ) 深町幸男
福田雅子 藤井深 藤井子ズ子
藤代勝博 藤田晋也 藤久ミネ
(ほ) 星田良子 堀川とんこう
(ま) 松尾羊一 松田輝雄
松平定知 松前洋一 松本明
松本修 松本国昭
(み) 三上義智 三国章 水上毅
水野憲一 満島保夫 三村景一
三村千鶴 宮川鏡一 宮脇殿雄
明神正
(む) 村上光一 村上憲男
村上雅通 村上佑二 村木良彦
村田亨
(め) 銘苅栄昌 (も) 守分寿男
諸橋毅一
(や) 八木康夫 矢島良彰
藪内広之 山泉昭彦 山崎隆保
山崎裕 山路家子 山田良明
山田尚 大和定次 山名光紀
山根基世 山辺麻未 山本恵三
(ゆ) 湯浅和憲 (よ) 横沢彪
横山英治 吉澤 保 吉永春子
吉村直樹 吉村誠 吉村光夫
(わ) 和田智允

編集後記

東京タワーを画面でよく目にする。
映画『Mavis三丁目の夕日』では建設
途上から描かれ、全貌の遠景が夕日に
映えて終わる。「東京タワー オカン
とボクと、時々オトン」では、主人公
の若者と母親を結ぶ絆の象徴としてと
らえられていた。オカンとボクはそれ
ぞれ田中裕子と大泉洋（フジ）倍賞美
津子と速水もこみち（同）。映画版で
は樹木希林とオタギリジョー（四月公
開）がどんな東京タワーを見せるか。
しかし、根っからの東京人にとって
は、東京タワーより連ドラ『浅草ふく
まる旅館』（TBS）の吾妻橋際に浅
草寺界隈、料亭「坂下」の「拜啓父
上様」が見せる神楽坂のたたずまいに
親近感をもつ。東京タワーは「もはや
戦後ではない」東京をめざした新東京
人たちの象徴だ。金の卵たちも上京学
生も居着いて、二つの東京観をめぐる
ドラマが都市生活の底流にある。
江戸期の「逃亡奴隷」（伊藤整）た
ちはご府内から見通せる富士山に望郷
を託したように、東京タワーは富士山
に代わって戦後日本の印しとなった。
「放送人の会」の東京在住者たちを
そんな目線で考えると興味深い。古里
をもつ二元論と故郷無き一元論的生活
者たちが遠望する現代の東京のシンボ
ルってなんだろうか、と。

◇ おわび・・・「会員年賀状」を依頼した際、
送信先のFAX番号を誤記してしまい、ご迷
惑をおかけしました。次号で改めて誌上で紹
介したく、ご希望のおかたは事務局FAX
（03-3221-0019）へ。松尾羊一